

## 史談

2011 (H23) 8・15

## ■ 役員会報告

去る八月五日、役員会が開かれ、文化財巡りの件と講演会について検討されました。その結果、文化財巡りについては、下記のように決定いたしました。

- ・期日・十月一日　・場所・新潟県 村上市
- ・参加費・3000 円の予定
- ・集合・中央公民館前　9 時 50 分
- ・定員・25 名　定員になりしだい締切ります。
- ・問い合わせ・文化振興係 85-6146 まで

なお、講演会の方は十一月十九日 1 時 30 分より、称名寺にて。講師に野口一雄氏（村山民俗会会長）を迎えて「郷目右京之進貞繁と称名寺の絵画」のお話を伺う予定です。

## ■ 八ヶ森足軽組

東禅寺城（酒田）を追われた志駄義秀に従って来た足軽は、寺泉と草岡に差し置かれ、「庄内足軽二十人衆」と呼ばれた。なお、志駄は慶長 7 年(1602)に荒砥城代（千石）になる。同 12 年、勘気を蒙り萩生吉祥寺に蟄居。その後元和 8 年（1622）には奉行職（国家老）となり 2 千石と出世している。

庄内足軽組は 20 人からなり、12 人が草岡村新町、8 人が寺泉村に置かれた。給与は一人扶持一石で、上杉家の直臣家臣団の中では最低の扶持であった。寛文 2 年（1662）下長井の国境警備という任務につくことになり、山口村八ヶ森 10 人、十王村元宿 4 人、十王村草木沢 5 人、滝野村中府番所 1 人が配置された。これが八ヶ森足軽組の始まりで、寛文 5 年までに、深山村四ッ屋 4 人、正部村榎沢 4 人、荻村 8 人、宮内村 2 人、十王村坂上 2 人の 20 人が、勸進代新地に居住していた陪臣の下條足軽より直臣に昇格し 5ヶ所に配置された。さらに城下の足軽から正部村榎沢へ 1 人、宮内村に免許百姓より新扶持を給されて足軽になる。合わせて 42 人による八ヶ森足軽組が出来上がった。

薄給にて自ら荒地を開いて生活を維持し、任務は国

境や要所の警備、禁制物資の出入を監視するもので、南波家文書には「支配下（八ヶ森組）之義ハ為諸締八ヶ所江被分置候間各其場所を相守穀物夏木実時より雪降迄順番日割を以昼夜廻村仕候」（山形大学附属郷土博物館所蔵）とある。横目と呼ばれ、きわめて危険な仕事であった。

十王村元宿の大滝長兵衛は、夜の見廻りに出て盗賊と戦い殺害されるという事件もあった。藩主の下長井巡覧には、宮・小出・鮎貝・荒砥の宿所に昼夜皆勤で火の番を勤めた。宗門改めには、各寺々をまわって宗門改帳に寺判を集めるのが主な役目であった。明和元年（1764）以降は江戸勤めも命じられ、嘉永 6 年（1853）には江戸海岸防備の目的で、八ヶ森組 14 名が派遣されている。

足軽組は、出来町の御附馬上の屋敷（元白鷹町長橋本周司氏宅）から沢を隔てて、称名寺の阿弥陀堂の方に向かって鉄砲の射撃練習をやった。対岸を鉄砲山と呼んでいた。

慶応 4 年（1868）7 月 2 日、秋田藩は奥羽列藩同盟に背き、10 日に出兵して院内を占領し、新庄藩も官軍に降ったとの報があった。米沢藩は鮎貝御役屋將本庄大和昌長を総督にし宮嶋掃部を参謀として兵を率い、新庄口から秋田を討伐することになった。

（江口儀雄）

## ■ 『町史』編纂

『白鷹町史』の続編を刊行する事業が、具体的に動き出したのだという。『白鷹町史』は上下二巻で、昭和五十二年二月に完成している。町村合併以来、郷土史研究の気運を背景に約五年の歳月をかけて刊行されたものだが、当時は市町村史の編纂・発行が一種のブームであり、それに乗り遅れまいと競うように県内の各市町村が、それぞれの地域史を刊行した時期でもあった。そのあたりの事情が、今回は少し異なる気がする。これからの作業だろうが、つまり、今、求められているのはどのような形や内容の『町史』なのか。

この種のものはいくら金や時間をかけても、後から見れば不備や不足はつきものである。郷土史、地方史、地域史などと呼び名は変わったが、その中味や発刊の意図は変わらないだろう。機は熟しているのか。ここはまずあせらず、轍をふまぬように、前回の不足部分

を点検してみてもどうか。どこが手薄だったのか、町民に広く意見を求めるなり、各項目を洗い出してみるのもよいだろう。それに前回の『町史』刊行後、新たにわかったことや発見もあろう。一方、たとえばこの町に水道や電気がいつ、どういう形で普及して現在に至っているのか。あるいはこの町ではいつごろから土葬から火葬に変わったのか。羽越水害や有線放送、遊郭などについては、今の『町史』にはほとんど記述らしいものがないらしい。ともあれ「急いで事は仕損じる」ともいう。英知を集め、忌憚のない意見交換が可能な組織づくりがカギではあるまいか。(山)

### ■ 土の中の卵

不思議なことがあるもので、先日の朝、向かいの町田さんが呼ぶので行ってみると、畑で芋を掘ったら土の中から卵が出てきたのだという。泥のついた卵を見ると傷もなく、形も大きさもニワトリの卵に似ていた。ただ、卵が一個だけ、それも土の中から出てきたことが不思議で、写真をとってから割ってみた。



中は普通の黄身と白身で、特に変な匂いもしない。何回か指でなめても変わった味はしないので、すすってみた。いくらか生くさい感じがしたが傷んでもいらないようなのでそのまま飲んだが、後で腹痛も起きなかった。その日は本会の役員会があったので聞いたら、狸のしわざだとか。確かに4~5百メートル離れた所に鶏舎があるが、狸がくわえてその距離を運び、隠したのだろうか。もともと狸にそうした習性があるのか、どうか。狸も冬の支度でもなかろうに、新鮮なうちに食べばいいのに、などと思った次第。(川)

### ■ 「銘酒泉酒のこと」

長井市の中央史談会が発行した『ながい百話』の中に「銘酒泉酒のこと」と題された短い文章が載っている。まずは借用して全文を引く。

「宝光院の境内に酒造業者の守護神の松尾神社の小祠がある。安政四年一八五七に京都の松尾神社の分霊を酒屋三軒で守護神として創建したものである。泉村三軒の酒屋とは伊丹屋鈴木兵弥・大坂屋八嶋権六・桔梗屋菅与五兵衛の三軒で、「東講商人鑑」という全国的商店名鑑にも「銘酒所」として出ており、明治十年には清酒二百三十石の醸造高があった。天保六年一八三五に米沢藩を代表する文人片桐忠成をはじめ九人の一行が長井に来て書いた文に『泉村に酒屋があり、しかも米沢藩内第一の銘酒と言われている』とほめたたえている。現在はこの酒造家はなく、松尾神社だけが残っている。」とある。

この件についての更にくわしい記述は『長井市史』にある。地名が「泉」というぐらいだから、水は良いはずだろうが実際はどうだったのか。ただ、この記述の中に「丸久豊長酒造合名会社」という名前は出ていない。土地の古老によれば「丸久」は小松の人で、今の多田石材のあたりに大きな土地を持ち、造り酒屋を営んでおり、その中には古久屋・高橋佐五兵衛の親たちがいたという。

しかしどういう事情があったか(一説にはこの場所は水質が悪かったという話もある)、十年ほどで酒造りをやめ、佐五兵衛らは四谷に移って人を集め、今の東洋酒造を起したというのである。古久屋・高橋佐五兵衛のことは、今回「長井新聞」の記事の中に今の市庁舎の土地を寄付した親方株で、議会厚生委員長として保育所、母子寮、火葬場などの建設に尽力したとあるのだが、一部がわかったものの十分ではない。高齢化が進むと周辺の事情を知っている人もいなくなる点で、まさに時間との勝負になってきた。(草)

### ■ 暑い夏

残暑お見舞い申し上げます。このたび、この会報が「白鷹町」のホームページから見るできるようになりました。「教育・スポーツ」から「史談会」と進んでください。あわせて感想をお聞かせください。